

自信をもたせてくれてありがとう

長崎県 南島原市立野田小学校四年 穂山 優成

ぼくは四人兄弟の二番目だ。お兄ちゃんが六年生で、ぼくは四年生だ。お兄ちゃんも運動も勉強も得意だ。それにくらべ、ぼくは運動も勉強そんなにもうまくない。

ぼくは今まで終業式がきらいだった。お兄ちゃんの通知表には、◎がほとんどない。お母さんは、いつも、「優成は、優成。くらべんでもよかよ。」

と言うけど、やっぱりくらべてしまつて、しゅんとなつていた。

三年生の冬、お母さんが、

「優成も漢字検定試験ば、うけてみんね。」

と言つた。もちろんお兄ちゃんは、毎年、受けていて合かくしている。ぼくは、どうしようかまつた。合かくするには、勉強しないといけないし、もし落ちたら、はずかしい。

まよつていると、お母さんが、

「優成、いっしょに勉強しよう。」

と言つた。それから、毎日、お母さんと本を見ながら勉強した。もうやめたいと思つたこともあつたけど、お母さんがはげましてくれるからがんばつた。

そして、ついにぼくは合かくした。やつたあとと思つた。お母さんにとでもほめられた。でも、そのときは、合かくしたことがうれしくて、お母さんがいっしょに勉強してくれたことをすっかりわすれていた。

四年生になつた。漢字五十題テストが始まつた。初めは、

五十題も覚えられるか心配だつたけど、なぜかすいすいと覚えられるようになっていた。そして、なんと二学期の五十題テストは全部百点だつた。お母さんが、「さすが優成。漢検七級だからね。」とほめてくれた。

それから社会の時間、県名を四十七こも、覚えなくてはいけなくなつた。しかも漢字だ。ぼくはがんばつた。そしてら学級で三位になつた。男子で二位になつた。

一学期の終業式の日、どきどきしているとき、

「優成君、よくがんばつたわね。」

と先生がほめてくださった。◎が少しふえていた。ぼくはにこにこになつた。いそいで家に帰つて、お母さんに通知表を見せた。

「優成、がんばつたね。これだけとれたら、上等、上等。」

と、お母さんがほめてくれた。おじいちゃんも、

「かめはのろのろとおそかけど、うさががねているうちに、うさがばぬいて一番になつたとぞ。優成もゆつくりでよか。ようがんばつたなあ。」

と、よろこんでくれた。

お母さん、ぼくに自信をもたせようと、漢字をがんばらせたんだね。今、気づいたよ。ぼく、少しだけ自信がついたよ。これからもかめみたいにゆつくりがんばるよ。お母さん、いつもぼくのことを思つてくれてありがとう。